

体験版

エンジニアありさ、

淫らな二百六十五日

シリーズ2
『開発されたカラダ、堕ちていくワタシ』

朝倉 楓

Kaede Asakura



体験版

エンジニアありさ、淫らな二百六十五日

シリーズ2

〜開発されたカラダ、堕ちていくワタシ〜

第二巻（全三巻）

©2025 朝倉 楓 All rights reserved

無断転載・二次利用を禁じます。

この物語のあらすじ

佐藤への依存が深まる中、ありさは帰省中の出来心で同級生リョウと関係をもってしまう。その残り香も痕跡も消えなくて——佐藤に知られた瞬間、場の空気が一変する。

怒り、嫉妬、独占——なのにあるさの身体は、その緊張に呼应するように熱を帯びてしまう。

そこに一つの辞令がありさに渡される。

異国の地で、快楽で壊され、欲で救われ、また堕ちる——中毒的な第二巻。

本作はフィクションです。登場する企業・団体・人物はすべて架空であり、実在のものとは一切関係ありません。



目次

Day 11	ハイパン	4
Day 12	辞令	19
Day 13	バンコクの熱い夜	30

Day11 バイパン

二〇二三年八月二十四日 木曜日

チャイムが鳴った瞬間、心臓が喉まで跳ね上がった。

三週間ぶりのユウトさんの帰宅。

玄関を開けると、スーツ姿の彼が静かに微笑んでいる。

「ありさちゃん……たたいま」

その声だけで、すでに下着がぐしょぐしょになっていた。

私は我慢できずに首に飛びつき、玄関先で激しく唇を奪い合う。

「会いたかった……ユウトさん……愛してる……」

抱き上げられ、リビングへ。服を剥ぎ取られながらベッドに倒れ込む。

一回戦は、焦らすようなスローセックス。

舌が這い、乳首を甘噛みし、クリトリスを優しく吸い上げられる。

ゆっくりと挿入され、正常位で深く深く貫かれるたび、子宮が震えた。

「あつ……ユウトさん……やっぱりユウトさんが一番……この深さ、子宮が喜んでる……」

腰が円を描くたびに膣壁が甘く擦れ、頭が溶ける。

キスを重ねながら徐々に加速し、ドクドクと中に出され、私は絶頂と共に彼にしがみついた。

余韻の中、ユウトさんの胸に顔を埋めていると、髪を撫でる指が、ふと止まった。

「……帰省、どうだった？」

静かな、でもどこか重い声。

私は息を呑んだ。

「……親に会えて嬉しかったし、母のご飯も懐かしかった。あと、同窓会もあったよ」

「同窓会？」

ユウトさんの指が、私の背中をゆっくりと這い始める。

「楽しかった？」

「うん……久しぶりに友達に会えて……」

嘘が喉に絡まる。声が震えた。

沈黙が落ちる。

ユウトさんが私の顎を優しく持ち上げ、目を覗き込む。

「ありさちゃん……何か、隠してるよね？」

瞬間、背筋に電流が走った。

乳首を摘んでいた指が、離れない。甘い痛みと焦らしがじわじわと広がる。

「え……な、何も……」

「嘘はダメだよ。さっき『ユウトさんが一番』って言ってたよね？」

声は優しいのに、瞳が冷たく光っている。

ユウトさんの右手がゆっくりと下腹部へ滑り、

まだ精液と愛液でぬるぬるの割れ目を、指の腹でそっと往復する。

「帰省中、俺に会えなくて寂しかったんだろ？」

「うん……寂しかった……毎日ユウトさんのこと考えて、疼いてた……」

「でも……寂しさを埋める二番目を見つけたってこと？」

言葉と同時に、中指がためらいなくズブツと奥まで沈み込んだ。

膣が勝手にギュウツと締め付ける。

「ひゃんっ……っ！」

ゆっくりと指を出し入れしながら、耳元で熱い息を吹きかけられる。

「同窓会の夜……何があったの？」

「……っ！」

指が二本に増え、Gスポットを執拗に擦る。

体がビクビク跳ね、腰が逃げようとするのに、ウエストを掴まれて動けない。

「答えて。」

「えっ……何もなかったよ……」

「嘘つくと、どうなるかわかってるよね？」

指がさらに深く決るように入り、膣壁を掻き回される。

「あっ……やっ……ユウトさん……！」

緊張と快感が同時に襲ってくる。

私はたまらず、

「ホ、ホテルに行っちゃいました……」

と、白状してしまった。

「誰と？」

涙が滲む。息が乱れる。

「……伊藤……くん……リョウって人と……」

指の動きが一瞬止まった。

部屋が凍りつくような静寂。

「どんなことしたの？」

声が低く、震えている。怒りか、興奮か、両方か。

私は震えながら、掠れた声で白状した。

「フェラしたら……三十秒でイかせて……それからバックで激しく突かれて……」

顔に……かけられて……」

指が再び動き出す。今度は速く、容赦なく。

「それだけ？」

「もう一度、会いました……帰る前日」

「それで？」

「ドライブに行って……森の中で……外で……中出しされて……」

ユウトさんの指がピタリと止まる。

息遣いが荒くなるのが耳に届く。

「アオカン……？」

掠れた声で問いかけられた瞬間、私の背中を冷たい汗が伝った。

「……はい……風に当たって……すごく気持ちよくて……何度もイっちゃった……」

……」

次の瞬間、ユウトさんのチンポが私の腹に当たって、熱く、異様に硬く膨張していくのがわかった。

嫉妬で血管が浮き、一回りも二回りも大きくなったそれを、
ゆつくりと、でも確実に私の子宮口に押し当てながら、

「スマホ……出して。伊藤くんとのLINE、見せて」

震える手でトーク画面を開くと、ユウトさんは私を抱えたまま覗き込む。
画面に映る、恥ずかしいほどの生々しいやり取り。

8月16日（水）

09:12 リョウ

おはよ白沢

昨日マジエロかった

朝起きたらまだチンポビンビンだわ

09:15 ありさ

おはよ♡

私も体が熱くてたまらない

伊藤くんの太いので子宮叩かれたの、まだ響いてる♡

今すぐまた入れてほしくて指入れたよ

09:17 リョウ

マジかよエロすぎる

写真送れよ

お前のびちゃびちゃマンコ見せてみろ

09:18 ありさ

ほら♡

伊藤くんの精子まだ残ってるかも

これ見てまた勃起した？

今から来て中出しして♡

(濡れた割れ目を接写で送信)

ユウトさんが画面を見ながら、低い声で呟く。

「ふーん……『今すぐまた入れてほしくて指入れたよ』か……」

『今から来て中出しして♡』って……

ありさちゃん、こんなエロいメッセージ送ってたんだ」

その言葉に、ユウトさんのチンポがさらに硬く熱くなり、私の中でビクビクと脈打つ。

（続きは本編で・・・）